

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2020.12)令和2年度:

,

小児がん患児の父親と母親の心理状態についての文献検討

長尾 菜由 八田 絵理

(指導: 森浩美 矢田しずえ)

I. 緒言

わが国では年間 2000~2500 人の子どもが小児がんと診断されている¹⁾。小児がんが疑われた時、子どもも親も症状や疾病に対する不安を感じる。小児がんの告知後は、絶望感や喪失感、未来に対する悲嘆に襲われ、親は子どもが病気になったことへの罪悪感を感じる²⁾。親の心理状態を検討する際に、直接付き添うことが多い母親に注目しがちである。しかし、近年女性の社会進出が増加し、入院・治療中の子どもに付き添う父親も多くなっている。父親には母親とは異なる立場だからこそその心理状態があると推測される。そのため、看護師は両者の思いに寄り添うために父親の心理状態にも注目する必要がある³⁾。しかし、小児がんの子どもをもつ親の心理状態に関する研究において、母親を対象とした研究が多く、両親を対象にした研究は少ない。本研究は、小児がんの子どもを持つ父親と母親の心理状態の相違について明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 文献検索

本研究では、日本の親、看護を検討するため文献に限定した。2020年5月に医中誌Web版Ver5を使用し、過去5年間を検索したが、研究数が少なく、過去10年間の2010年1月から2020年4月の文献を対象とし、「原著論文」「会議録を除く」「看護文献」を条件とした。検索ワードは、「小児がん」「心理」「思い」「気持ち」「認識」「母親」「父親」「両親」とし、これらを組み合わせて検索した。検索された60件から重複文献39件を除く18件の抄録を確認して、「親の心理状態が具体的に記載されていないもの」と「英語文献」を除外し、8件を分析対象とした。

2. 分析方法

1) 研究動向: 文献の「発表年」「研究目的」「研究対象者」「研究方法」によって分類した。
2) 心理状態: 対象となる9件の文献を読み、小児がんの子どもの親の心理状態に着目し、該当する部分を抽出し、もしくは忠実に要約し、母親の心理状態については質的記述的に分析した。父親の心理状態に関する文献は1件だったため文献の結果を本研究の結果として、母親と父親の心理状態の相違を検討した。

3. 倫理的配慮

本研究は先行研究に基づく研究であり、引用・参照した文献の出典を明示し、引用に配慮した。

III. 研究結果

1. 親の心理状態に関する研究動向

1) 研究発表年: 2010年2件、2011年3件、2012年1件、2014年1件、2015年1件、2016年1件
2) 研究対象者: 母親7件、父親1件、両親1件
3) 研究方法: 質的研究9件

2. 親の心理状態

分析の結果、179コード、17サブカテゴリー、8カテゴリーが抽出された。その結果について表1に示した。そして、母親と父親の心理状態を比較したものを表2に示した。以下、サブカテゴリーを〈〉、カテゴリーを【】とする。

表1. 母親の心理状態

カテゴリー	サブカテゴリー(コード数)
小児がんの子どもの親としての後悔・自責	小児がんの子どもを守れない親としてのふがいなさ(10)
小児がんの子どもの再発や死への怯え	子どもの死が頭から離れない(8)
	がんになった子どもを失う不安(16)
	がん治療を終えて退院が決まっても消えない不安(15)
がんという病気になって子どもが衰れ	侵襲の大きい治療を受ける子どもが不憫(6)
	子どもの死を悼む(2)
心の支えを信じて得た治療への希望	子どもは治ると信じる(20)
	家族や周囲の人に支えられる(28)
	医療者の存在に救われる(11)
子どものがん闘病を支える夫への思いやり	闘病生活を歩む夫へのいたわり(6)
小児がんという病気から健康を取り戻したことへの安堵	長い治療を終えて健康を取り戻したことへの安堵(11)
	退院後の生活を喜び子どもの健康を保持したい(13)
	夫や同胞と分かり合えない気持ち(2)
周囲の対応が自分の期待に添わないもどかしさ	医療への不満・要望(8)
	がん治療を終えた子どもが通う学校への期待と不信感(6)
やれることはやったと子どもの死を受け入れる	つらい治療を頑張った子どもに安らかな終末期を願う(4)
	子どもの死を受け入れ喪失体験から生き方を見出す(13)

表2. 母親と父親の心理状態の比較

	比較	母親	父親
共通	不安・恐怖	再発や死への怯え	告知前の不安 がん=死の恐怖 病気を受け入れ難い
	期待・望み	心の支えを信じ治療への希望	医師への信頼 子どもから勇気をもらう
	健康の有難さ	健康を取り戻した安堵	当たり前の有難さ
	人々への思い	夫への思いやり	職場の人々への感謝 同胞に感謝 家族の絆の深まり
	親の責任	やれることはやったと死を受け入れる	してやれることをする
差異	ポジティブとネガティブ	自責・後悔	気持ちの切り替え 強く明るくふるまう 優しさ・強さを身につける
片方	子どもが衰れ	子どもが衰れ	
	人々への落胆	期待に添わない	
	副作用と病気		現実の受け入れ

IV. 考察

子どもが「小児がん」であると告知を受けた際には母親も父親も、【小児がんの子どもの再発や死への怯え】を感じ、母親は【がんという病気になって子どもが哀れ】という気持ちをもっていた。これは、がん=死というイメージから起こる心理状況であると考えられる。現在、医学の進歩により小児がんは8割が寛解を維持し、慢性疾患として捉えられるようになってきている。看護師は両親が納得いくまで疾患や治療、副作用や予後についての説明を受ける機会を設け、子どもの病気を正しく理解できるようにする役割がある。また、母親と父親では子どもががんであると現実を受け入れる時期は異なる場合があるが、両親共に【治療への期待・望み】をもち治療に臨んでいた。小児がん治療は長期に及び、その過程には困難な状況も起こり得る。看護師は両親の気持ちや考えを聞く機会を設けて心理状態を捉え、【治療への期待・望み】が途絶えないように支援する。そして、子どもとどのような闘病生活をおくりたいかを話し合い、叶えることが重要となる。

告知後、母親はもっと早く気づいていたらといった【小児がんの子どもの親としての後悔・自責】を感じていた。一方、父親は親として子どもにしてやれることするといった気持ちをもち、強く明るく振る舞おうとしていた。これは家族を守る立場の父親だからこその心理状態と推察され、男らしさというジェンダー観念が作用していたのではないかと考える。看護師は感情を表出する母親に対しての関わりだけでなく、父親に対しても介入していく必要がある。弱さをみせないという父親の気持ちを尊重しながら、父親が表出できない気持ちを推測し、父親が気持ちを表出できる環境を整え、看護師にも気持ちを表出できるよう信頼関係を築くことが必要である。

母親は子どもや夫への感謝を挙げている一方で、父親は職場の人や同胞への感謝を挙げている。これは、子どもの入院には母親が24時間付き添い、父親は仕事をしながら同胞の世話をしている場合が多く、家族間で役割の分担が行われているためであると考えられる。

治療中の母親は夫や同胞と分かり合えず、もどかしさを感じていた。治療を終えた後は、母親父親共に健康を取り戻したことに安堵し、健康という当たり前が幸せであると感じていた。看護師は可能な限り家族で過ごせるような時間や空間を確保し、治療を家族で乗り越えられるような環境を整える。それにより、親は子どものがんを家族で乗り越えたこと、家族の絆の強まりや家族の時間の大切さ、健康の有難さをより一層強く実感することが可能になる。

退院後には学校の対応への期待や不信感を感じていた。看護師は子どもや家族と学校をつなぐ架け橋となり、退院後も安心して生活を送れるよう多職種との連携をとることも必要である。

子どもが亡くなってしまった家族の場合、自分を肯定し、子どもの死を受け入れるという心理に至った母親もいた。子どもの死を受け入れ、子どもとの思い出を大切にし、親である自分を肯定できる人生を送るためには家族がやれることはや

ったと感じることが必要である。そのため、子どもや家族が治療や療養生活を自己決定することが重要であると考えられる。看護師は本人や家族の自己決定を支援し、前向きに治療に臨めるよう関わる必要がある。

V. 結論

本研究の文献検討から、小児がん患児の母親父親共に小児がんと告知を受けた時には死への恐怖を感じながらも治療に向け前向きな気持ちをもっていたことが明らかとなった。また、母親は後悔や自責の念を感じているのに対し、父親は弱さを見せないというジェンダー観念が前向きに強く振る舞うという心理状況に影響を及ぼしていた。小児がん患児の父親と母親の様々な心理状況を理解し、関わっていくためには、看護師は個々から話を聴く機会を設ける必要がある。

VI. 研究の限界

今回の研究では父親の心理状態の対象文献が1件と少なく、一般化するには限界がある。そのため、今後父親を対象とした研究の蓄積が必要であると考えられる。

VII. 対象文献

- 森浩美(2010):小児がんの子どもの亡くした母親の体験, 小児がん看護, 5:17-26
- 田邊美佐子(2010):造血幹細胞移植を受けた子どもを持つ母親が療養体験を意味づけるプロセス, 日本看護研究学会雑誌, (2):23-33
- 江里文, 大町いづみ, 森藤香奈子, 他(2011):小児がんにより長期入院している小児の母親が認識する父親の役割と変化と, 保健学研究, 23(2):15-21
- 杉野健士郎, 前田貴彦, 白井徳子(2011):幼児期の小児がん患児に付き添う母親が父親に抱く思い, 三重県立看護大学紀要, 14:33-39
- 納富史恵, 兒玉尚子, 藤丸千尋(2011):小児がん患児の父親が困難な状況を受け止めていくプロセス, 日本小児看護学会誌, 20(3):59-66
- 有森葉子(2012):終末期における難治性小児がんの子どもをもつ母親への看護師の関わり 窮地に陥った母親を支えた関わりを検討して, 日本小児がん看護学会誌, 26(2):93-97
- 横森愛子, 谷澤みどり, 加藤由香, 他(2014):小児がんの子どもを見る母親が療養体験中にセルフ・エンパワメントを生成するプロセス, 日本小児看護学会誌, 23(3):34-41
- 山地亜希, 桑田弘美(2015):小児がん患児の家族による退院への認識と在宅ケアマネジメントの実際, 日本小児看護学会誌, 24(2):35-43
- 川崎幹子(2016):闘病生活を経て子どもを亡くした母親の喪失体験から子どもの死を受け入れていくプロセス, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 8(1):9-15

VIII. 引用文献

- 1) 国立がん研究センター小児がん情報サービス(2020-6-1): 小児がんとは, https://ganjoho.jp/child/dia_tre/about_childhood/about_childhood.html
- 2) 江本リナ(2016):新訂小児看護学, 231, 一般財団法人放送大学教育復興会
- 3) 紺野希有子, 佐藤朱美, 青江由希, 他(2013):入院した乳幼児に付き添う父親の思い